# 四季折々の清朝宮廷――皇室の生活と文化

古代中国では、皇帝の統治権は天与のものであると考えられていました。そのため歴代の皇帝は、暦の正確さに心を配り、天体観測に基づく暦を使用しました。また自らの生活や行事を自然の周期に合わせることも重視していました。

本展では、清朝(1644～1911年)の経済、政治、軍事活動、生活、文化の様々な側面を、季節の情景とともに紹介します。皇帝がこなしていた多忙な業務を追っていくと、宮廷の重要な年間行事が見えてきます。序盤では、清朝で使用されていた暦に着目します。続いて、春が到来すると行われてきた、農耕と養蚕を奨励するための「耕」と「織」の儀式を取り上げます。夏になると、宮廷の舞台は涼しい承徳の避暑山荘に移りました。この地で皇帝は、様々な部族の指導者と会談しました。このことからは、文化が共存した清朝の性質が窺い知れます。秋には宮廷は木蘭囲場と呼ばれる狩猟場へと移り、軍事訓練を行い、武芸の研鑽に力が注がれました。そして冬には旧正月を祝い、新年への願いが捧げられました。

本展は、香港故宮博物院と故宮博物院の共同開催となっています。
アートディレクションと会場構成はOLI Architecture PLLCが務めました。

# 天の巡りと共に

農耕作業の計画や祭の日程など、すべての社会活動には正確な暦が必要でした。天体現象の観測に基づいて作られた暦を発布するという行為は、主権の象徴でした。

明朝（1368年～1644年）の終わり頃、朝廷は暦局を設立し改暦事業を行いました。しかし、伝統的な手法と西洋の新しい手法を巡る論争はその後も継続しました。康熙帝（在位1662年～1722年）は中国の歴史上、唯一天文学を習得した君主です。清史稿によると、康熙帝は「自ら天体現象を解読し、極めて微細な理に至るまで究明できた。7つの新しい天文機器を製作し、太陽や月、星々の運行軌道を測定するにあたっては、弧分や弧秒の単位まで正確であった」とされています。康熙帝は明朝末以来続いていた暦論争を終わらせ、西洋の数学と天文学の概念に基づいた時憲暦を復活させました。この時憲暦を支える理論は、今でも世界中の中国人コミュニティで使用されている暦である太陰太陽暦（正確には違いますが、一般的に旧暦として知られています）の基礎となっています。毎年、旧暦10月の1日には、紫禁城の正門である午門で、翌年の暦を発布するための盛大な儀式が行われていました。この暦は、清国の社会全体のすべての重要な活動のための不可欠な指針として役立てられました。

# 春、農耕と養蚕

農耕と養蚕は、中国経済の柱でした。歴代の朝廷は、こうした経済活動を奨励するための儀式を執り行っていました。「皇帝が都の南郊で畑を耕し」、「皇后が北郊で蚕の世話をする」ことは、最も重要な儀式の一つでした。清の皇帝も同様に、農耕と養蚕が経済的繁栄に不可欠であることを理解していました。雍正帝（在位1723年～1735年）は、先農壇と呼ばれる祭祀場を何度も訪れ、生贄を捧げたり、自ら畑を耕したりしました。孝賢皇后（1712年～1748年）は豊蚕を祈願するため、乾隆帝の治世だった1744年の旧暦3月に先蚕壇で祭祀を行いました。さらに清朝の宮廷では、旧暦2月の「花朝節」に花神を祀り、養蚕活動を奨励し、豊蚕を祈願しました。

農耕や養蚕の技術を振興するために、男性が農耕に携わり、女性が織物をする様子を描いた図柄は、宋代（960年～1279年）までに体系的な形式に発展しました。詩が添えられた一連の絵は、作物の栽培や織物の製造を記録として残すものでした。清の宮廷では、絵画以外にも耕織図の文様で装飾された多くの器物が制作されました。乾隆帝（在位1736年～1795年）は、清漪園（せいいえん/現在の頤和園）に「耕織図景区」を創設し、耕織の情景を再現しました。

# 夏、避暑

北京の夏はうだるような暑さです。18世紀初頭より清朝の皇帝たちは、旧暦の5月から9月にかけて、承徳山荘に滞在するのを常としていました。ここは避暑山荘としても知られていました。康熙帝（在位1662年～1722年）は、この地を「標高が高く開放的で、空気も澄み、煙霧がない」と表現し、「美しい峰々と広大な澄んだ湖に囲まれ、爽やかな大気に覆われている」と称賛しています。承徳は実に素晴らしい避暑地でした。

承徳避暑山荘は、紫禁城の外の政治の中心地でもありました。皇帝はここで、上奏された文書に目を通し、大臣を招見したほか、軍事・政治問題も処理していました。さらに、同盟関係にある部族の指導者らも引見しました。1755年には、乾隆帝（在位1736年～1795年）は、ジュンガルの平定を祝し、モンゴルの貴族を招き盛大な宴会を開催しました。1780年には、チベットのパンチェン・ラマ六世（1738～1780年）が乾隆帝の70歳の誕生日を祝うために承徳避暑山荘を訪れました。1789年には、安南（ベトナム）の代表団が貢物を献上するために承徳を訪れ、皇帝と謁見しました。乾隆帝が1793年にイギリスの公使マッカートニー卿（1737～1806年）を接見したのもこの山荘です。夏の承徳避暑山荘における清朝宮廷の活動は、満州族、漢族、モンゴル族、イスラム教徒、チベット族など、多民族間の交流を大きく後押ししました。

# 秋、狩猟

秋になると、朝廷は承徳避暑山荘から北へ約150キロメートル離れた木蘭囲場（もくらんいじょう）において、大規模な狩りを頻繁に行いました。「木蘭秋獮（木蘭囲場での秋の狩猟）」と呼ばれたこの行事では、満州八旗軍が野営を警護し、モンゴルの貴族が皇帝に随行しました。1683年から1817年までの135年間に、清の皇帝が木蘭囲場へ狩猟に赴いた回数は100回近くに及び、1回あたりの滞在期間は約1ヶ月間でした。

木蘭秋獮は、大規模な軍事演習と国家の儀式の両方を兼ねていました。狩りに出て武芸を鍛えることは、満州の長い伝統でした。乾隆帝（在位1736年～1795年）は、「平時に狩猟を怠ると、満州の兵は安逸な生活に慣れ、騎射の腕前も次第に衰えてしまう」との信念を持っていました。大規模な狩猟の際には、数千人が参加して、獲物を追い込む、包囲を徐々に狭める、囲いの中の動物を狩る、残った動物を逃がす、という役割を果たしました。狩猟では、個々の騎射の腕前が求められただけでなく、八旗の諸王、官吏、兵士の企画力や連携能力も試されました。同時にこの行事は、モンゴルの諸民族の指導者を引き立て、良好な関係を維持するという役割も持っていました。乾隆帝は、木蘭囲場での狩猟を国家の儀式に組み入れ、1741年に第1回目の秋獮式典を開催しました。乾隆年間には、40回以上の秋獮式典が行われました。

# 冬、迎春

旧正月の祭典は一年で最も盛大なお祝いで、祝賀行事は旧暦の12月1日から2月2日まで続きました。宮廷では、古い年に別れを告げて新しい年を迎えるための一連の行事が執り行われました。吉祥の意味合いのある物品を用いた宮殿の装飾、先祖を祀り偲ぶための儀式、皇族や高官との間で親睦を深めるための宴などの行事は、賑やかでありながら厳かなものでした。

清朝の宮廷では、灯籠は旧暦の12月24日に吊るされ、翌年の2月3日に片付けられるのが通例でした。紫禁城内の乾清宮と皇極殿に、何百基もの灯籠が吊るされることもありました。宮殿の吊り灯籠は通常、天蓋付きで、側面や下部に房飾りが加えられるなど、豪華な装飾が施されていました。雍正朝（1723年～1735年）には、円明園で大規模な灯籠祭りが開催されており、宴や演劇、花火が催されたほか、様々な工芸品や衣装にも灯籠文様が用いられました。中国語では、「灯」の発音が豊作を意味する「五穀豊登」の「登」と同音であることから、灯籠には豊作祈願という吉祥の意味が込められていました。灯籠を飾る行為は、春の農耕や養蚕から穀物が倉を満たす冬に至るまで、一年間の耕織の巡りを祝福し、感謝を捧げることでもありました。